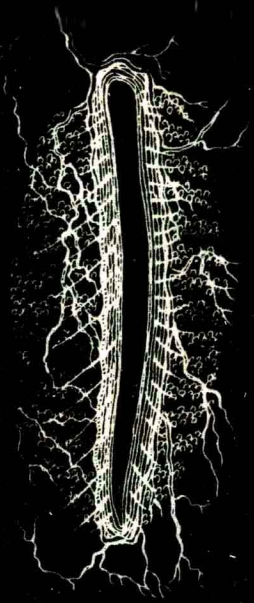
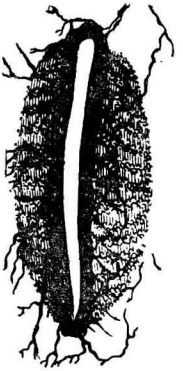


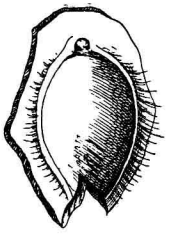


暗黒への出発　著者——高橋和巳
©Takako Takahashi, Printed in Japan, 1971〈検印廃止〉
初版印刷——昭和四六年九月三〇日　初版発行——昭和四六年一〇月五日
定価——五八〇円　造本——杉浦康平＋辻修平　口絵写真撮影——関根薫
発行者——徳間康快　発行所——株式会社徳間書店　東京都港区新橋四—一〇—一　電話東京四三局六三一〇(代)　振替東京四四三九二
本文印刷——株式会社清水印刷所　製版印刷——真生印刷株式会社
製本——大口製本印刷株式会社　製函——日本紙パルプ商事株式会社
本文用紙——三菱書籍用紙イエロー七二kg　本文判型——九ポ六〇倍×四〇倍　活字——日本活字株式会社
乱丁・落丁本はお取りかえいたします　0095—188412—5229

暗黒への出発——高橋和巳

暗黒への出発——目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



I—わが悪魔論

憂鬱を語る世代——8

わが悪魔論——16

暗黒への出発——26

七〇年代第一年目の状況——30

II—状況と文学

文学の根本に忘れ去られたもの——38
状況と文学——140
生命について——196
高橋和巳論—秋山駿——212
暗黒への出発—解題——240
高橋和巳著作目録——244

I——わが悪魔論

憂鬱を語る世代

——高橋氏は第一回文芸賞受賞作品『悲の器』以来、『邪宗門』と『我が心は石にあらず』という二大長篇を連載中で、こんどの作品は本になったものとしては二番目の長篇だが、この『憂鬱なる党派』は、高橋氏の作品歴のどのあたりに位置するのだろうか……

高橋——『憂鬱なる党派』を書きはじめたのは、約八年も前のことで、その途中で『悲の器』ができた。ぼくにとっては、『憂鬱なる党派』がいわばテーゼで、『悲の器』がアンチ・テーゼであるつもりだったのが、発表される順序が逆になってしまった。『憂鬱なる党派』にも一部でてくる老教授の態度は、そのときの若い自分たちと対峙するものとして、世代の睨み合いみたいなものを描こうとしたもので、それが『悲の器』になってるわけです。『憂鬱なる党派』があとになったために、たとえばぼくがなぜ右翼のことを書くのかと不思議がる人があったのだが、こんどの作品でわかってもらえる

だろう。

――題名の『憂鬱なる党派』について高橋氏は、河出書房のパンフレットで「作者のことば」として、「太陽の季節を謳歌した青年たちだけが戦後いたのではない。……敗戦の苦痛はまだ癒えずしかも新しい理念は形成されないままにお互いに角逐し、分裂しやがて諸共についえ去った憂鬱な青春……」と書いているが……

高橋――題名にある党派は、もちろん政治的党派という意味ではなく、世代といってもいい。

ぼくらのあの時代は、たしかに奇妙な時代だった。忠実なる臣民になるための教育を受けて、それを疑うこともなく、国家に対する行為のみによる価値判断の中で育って、それが突然に崩れてしまったのです。そして二、三年パッと明るい期間があり、けれどもなにもわからないままでいると、だんだん日が陰ってゆくように再び時代が変わっていった。それはちょうど進駐軍の方針が変わったのと一致しています。

ぼくらは、一度ならず二度もドンデン返しを、わずか十四、五歳から二十数歳までの間に経験し、それが深い懐疑をうえつけたのだと思います。若かったから、現実に対して批判的になることができないで、時代の屈折の流れにドップリつかっていたから、「また変わりやがったな」と軽やかに身をよけることはできなかった。

そのぼくらの世代にはいくつかのタイプがあった。放蕩していっさいをあきらめるもの、あるいは冷笑的になってなに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もかもヘラヘラと笑いとばすもの、そしてまた、他の世代にくっついてゆくタイプ、これは、比較的理解できる戦中派の人に身を寄せていって、そうでない人を批判するものと、もうひとつ、それとは逆に、大江健三郎氏や石原慎太郎氏など、後の世代に身を寄せてオートバイをとばしたりするものとがあった。

しかし、それらのほかに、ロダンの彫刻「考える人」のように、こう頭をかかえて、十年も考えこんでいた人間がいる。それがいま怨みをこめてでてきた。

——そのような人びとが、たとえば「挫折」するのでもなく、衝動的な行動に走るのでもなく、「憂鬱」になっていったのはどういうことだろうか。

高橋——戦中派にしても、あるいは安中派といわれる人にしても、彼らにはいつも対立者が必ずあった。こんどの小説にでてくる〈憂鬱派〉の多くの人びとは、広い意味では左派なのだろうが、いずれも複眼の持ち主であり、いくつもの立場のことがわかり、そのために、威勢よくはなく、憂鬱になっていくほかなかった。

たとえば評論を書く場合にも、歯切れよく単一化して述べるのがいいとされるが、ぼくの場合にはなにかについて書いても、こう曲りくねっていてなにを書いているのかわからなくなる。だから、物量の投入がないと理解されないわけで、長篇を書くことになる。

つまり、あまりにも重たい問題を背負わされて、すぐに表現へと進んでゆけなかった人びとがいた。彼らは当然、雑誌

作家にはなれないわけで、登場しなかった。しかし、戦後のジャーナリズムがやっと、こんどのように長いものを書かせようというようになってきて、ちょうどそれが、十年くらいウンウンと苦しんできてやっと整理できるようになりつつあるさっきいった人びと、つまりぼくらとが、うまく交わったのだと思います。

『憂鬱なる党派』にしても、八年間をかけていて、いろんな問題が派生して、あの中のいくつかの部分はすでに短篇にしている。たとえば『散華』なんかもそうだといえるし、また、評論になっている部分もある。しかし、書いた順序からはもちろん『憂鬱なる党派』のほうが先になるわけで、もし将来ぼくの文集でもでるなら、よくできていても評論のほうをけずる。『憂鬱なる党派』にある混沌のほうが書きたいことだから。

――こんどの小説も『悲の器』のように、インテリゲンチアの問題をあつかっているのだが、そのインテリたちが動く舞台が大阪の、あの西成のスラム街に設定されていて、実際にあった釜ヵ崎一帯の浮浪者の暴動騒ぎもフィクションの一部としてでてくる。主人公はそこのドヤに流れ住みついて、娼婦と相部屋で暮すのだが、生きる糧を得るために古本売りから猥本書きまでするようになり、その暴動時には突如として絶叫しアジテイトする。高橋氏にとってそういった釜ヵ崎とはなんなのだろうか。

高橋――ぼくは実際に西成の生れなのです。『悲の器』みたいなむつかしい小説書いたオッサンが釜ヶ崎で育ったといったらびっくりしますね。

『憂鬱なる党派』の主人公は、インテリゲンチアとしての生活から、庶民の、しかも最底の部分にはいってゆく。インテリゲンチアはインテリとして這い上ってゆくことで、その生活基盤を裏切ってゆくと思うのです。インテリゲンチアのほうはそういうつもりではないのだが、庶民のほうからは裏切りと映る。

ぼくが釜ヶ崎のそういったところからでていったそのことを書くために、その逆の形の、はいってゆくインテリゲンチアとして、あの主人公を設定したともいえます。ぼくには根っからそういったものがあって、『悲の器』に書いたような最高の権威への怨みみたいなものがある。

――ではこの小説に登場する人物たちの設定や舞台の選び方は、高橋氏の体験に基くものなのだろうか。たしかに、主人公の風貌は高橋氏を思わせるところがある。

高橋――『憂鬱なる党派』のいく人かの人物たちは、それぞれぼくの分身だといえる。いくら大虚構を設けるにしても、いくらかの体験をもとにしてでないと、虚構をふくらませることはできない。

しかし、日本人は、そこをまた逆に、表現をすべて事実的に読んでいる。虚構の組み立てとか、イメージとか、あるいは想像力といったことをいくら説明してもわかってもらえない。平野謙や伊藤整の評論にしても、事実をやや変容したも

のとして小説を読んでいる。そういった意味で、日本の文学批評は歪んでいるし、また、日本の一般読者のほうも歪んでいて、たとえば、あまり華々しいロマネスクは嫌われる。だから、作家の側からすれば冒険ができないことになって面白くないのです。

そこで、ぼくの方法としては、そういったことを逆にとって、事実から虚構というのではなく、この頭の中で考え想像したものをどう描くかということで、そのためにもっともらしい事実や歴史的時間などを選びます。『邪宗門』の場合にも、ぼくの書きたいことがノートになっていっぱいたまると、それにふさわしいものを探す。そのためにぼくはいろんなところへゆき、調べた。天理教も創価学会も。そして大本教がもっともふさわしいと考えた。もちろん、だから、小説の中では、大本教の実際の教義とはちがったものになっているわけです。

こんどの『憂鬱なる党派』は、はじめて自分に即して書いたもので、誰でも一度は書きたいと思っているものを書いた。もうあんな青春小説は二度と書きたくないですね。もしまた書くなら、もっと夢のある青春を書きたい。

——主人公が教師生活の中で、突然褐色のゆえしれぬ憤怒にから
れて、教師を辞め、五年をかけて書きつづって、出版しようとし
てもち歩く原爆被爆者の記録は、ついに出版されずに終わるのだ
が、あの黒いカバンにはいった原稿はいったいなんなのか聞いて
みたいが……

高橋——結末は最初すこしちがっていました。インテリが庶民の記録を残そうと夢をもって出版したく思っているときには、庶民と違和していて、実現しない。ところが、そのインテリが死んで、純粋に原稿そのものだけが残ると、その原稿自体はもはや違和感などもたらさず、それを見つけたなんでもない一庶民が出版しようとする、というふうな結末になっていた。しかし、バタバタと主人公たちが死んでゆくし、それに、被爆者の記録なども、ぼくが『憂鬱なる党派』を書きはじめたころにはまったくなかったから、あのような発想もあったのだが、ずいぶんいまはちがってきている。小説の本質的部分にかかわることがそのように変わった。

——高橋氏はこの前に『堕落』という小説を書き、こんどの作品でも荒廃とか堕落とかいった言葉がでてくるが、それは世代としてのものだけなのだろうか。

高橋——表面にある思想のほかに、深層思想とでもいうべきものがあって、それがぼくに書かせる。それは、ぼくの生れ故郷であるドロドロした釜ヵ崎へ墜落して戻ってゆきたいという欲求で、ああいうふうになりたいというフロイト流の欲望、フランス人がよくいう「泥沼への欲望」があるわけです。理念としてもっているもののゆえに緊張度がいつも高いわけだが、それらをすべて投げだして、道路にドタッと寝ころがっているあの最底部のオッサンたちみたいに、ぼくもドタッとしたいという欲望ですね。

しかし、いままでに、もういくつかそういったものは書いていて、逆にそれによって自己決定してしまうことになりか

ねないので、次には、最悪のところから立ち直ってゆく人間を書きたいと思っています。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com